（史料紹介）尾張藩海防史料「赤心秘書」についての紹介・翻刻②

長　屋　隆　幸

はじめに

前回に続き「赤心秘書」巻一の翻刻を行った。今回は、巻一の「一　御軍用ニ可立士之風俗之事、他国ニも文武之分有事」から「一犬山城人数少ニ相成候事、松倉豊後守武備怠り嶋原陣之事、長州萩之城下守方之事、尾張ハ古より盗賊之張本有之事」までを翻刻した。これにより巻一全体の翻刻が済んだことになる。

本来ならば前回行ったように各箇条ごとに簡単な解説をつける予定であった。しかし、巻一の終わりまで翻刻を進めることに重点を置き紙幅を使ったこと、また軍学用語が多くでてきており、それなりに紙幅がないと解説しにくこと、この二つの理由から今回は解説掲載を断念し、次回において示すことにした。

なお、旧字・異体字などは原則常用漢字に直した。また、合字は開いた。

翻刻

御軍用ニ可立士之風俗之事、他国ニも文武之分有事

一是迄之同心与申候士ハ東武江も不出、武芸而已ニ而戦闘の御用ニ可立士ニ候所、大番組なとニ相成候故ニ何れも御役附に而も仕度存念故、肝心之武備之事なとハ二段ニいたし筆算を習、御役附をいたし御役金ニ而も不出工夫を仕候、御軍用ニ可立士ハいかにも不骨者之田舎ら敷家主人我頭より外ニ大切ニ可致事ハなひと筋ニ思ひ込、世間を知らぬ士ならてハ難用候、是迄之同心之類ハ御軍用ニ可立風俗ニ而誠ニ田舎者ニ而言葉之端ニハ其頭之名を呼、芸能を募候事必有て余りおかしき様ニなれとも古風も残り致程宜敷候、昔も信濃士なとゝ申候而信・甲・北越之士ハ夫骨ニ而へんくつなる士故ニ軍用ニも立賞美いたし候、他国ニ而も古き家ニハ第一軍用ニ立候士を立、第二ニ諸役人を撰候事之由、長州萩等者戦士八百人と定め是ハ江戸江も不出、代々萩に差立置、武芸而已稽古為致、武芸出精いたし候者ハ其頭々より申達加増等段々ニ給り、武芸不出精之者ハ知行減少被申付候故、八百人之士ニハ独として武芸に達シ不申者者無之由、至極尤なる事ニ候、前々之同心ハ少此姿も候処、気の毒成事ニ相成候、奉申上候迄も無之く事ニ候得とも孫子軍形之篇ニ申候ハ勝兵鎰を以銖をねることく、敗兵ハ銖を以て鎰をねることしと有之候、鎰ハ重く銖ハ軽き也、重きと軽きと秤ニ而懸合すれハ軽きハ重きに不勝之理也、譬ハ両陣互ニ備たる時ハ何れか重き何れか軽きとも知れされとも打合て見るといなや能練りたる兵と練らぬ兵とハ軽き物のおもき物ニ上れれたるか如く一たまりもなく打負る事ニ而此鎰銖之意も其備を重くせんとなりとも軽くせんとなりとも只侍大将之心一ツにな

る事ニ而常々士ニ礼義廉恥をしめし折々
和国ニ而軍之習う之場所 操練之場所ニ而軍事之習しをいたし能練りて足軽ニハ弓・鉄砲・長柄、中間ニハ長柄之打様長柄之組様、士ニハ武芸を能為致置候て上手を揃て備に立る時ハ其場強く貫目も重き也、士ニ武芸もなく所凡(作)進退之練もなきハ軽き兵也、孫子か制有兵ハ重く制なき兵ハ軽くと申候も此事ニ而士ハ武芸無油断其頭　/＼ニ能親附為致候事ニ候、其備を重くして敵ニ勝へき事を致す為也、此故ニ武芸ハ侍大将より遂吟味稽古無油断不為致候ハ而ハ成かたく候、然るに同心相止候上ハ士之気風も向替り文算之風にも推移り候様ニ相見座席廻り立振り迄も心を用ひ候様ニ相成候事、御治世之上ニハ至極宜敷候へ共、武を以申候ハヽ歎敷事ニ相成候、前々同心之有之候節ハ御家中二男・三男或ハ浪人者ニ而も武芸等能仕候へハ同心ニも御召抱知行も取れ候事故ニ自迄芸能に励も仕候処、同心等も無之候上ハ何程武芸仕候而も武芸有之御弓役之外ハ被　召出候事無之事を存候故、信実に武芸を心懸申候ものハ壱人も無之候、是程御家之御大事ハ無之候、前々御認候通此上ハ御家ニ武芸の上手も出来仕間敷年々と御軍用ハ御手薄ニ可成候、二百年及久敷御組合せ有之候事ニ而方々根さし広かり芸能も相互ニ励合候処に、わつか五十騎ニ御組直し被成、古き御軍法御改被成候故是迄親附いたし候頭を離れ大勢慥成頭もなく相成事ハ徂徠か問答ニ申せしことく古家に住し譬のことくなる先祖より持伝たる国を請取たる人ハ人の造りたる古家に住かことく、今其古家を住居を仕直し候事ハ如何様ニいたし候而も元来之物数寄別ニ候故十分ニハ直され申間敷、爰の柱を抜かしこの引物を取れと当分之物数寄ニ任せて直し候時ハ思之外なる所の根太落柱ゆるミ夫より家之弱ミとなりて直さぬ先よりハ悪敷成事多きものニ候、愚老ことき貧者の古き家ニ住るれ(ママ)者ならてハ此喩も御存ある間敷と申事ハ今般之御人数御組替之事或は大幸江筋御立替之事実ニ直さぬ先よりおとりたる事に成申候、其源たつね候へハ御軍用を相勤候輩軍学未熟ニも候哉、軍学之根本と仕候事ハ古書ニも神なる哉　/＼無形ニ到ると御座候、此無形と申候ハ常々之能有形を尽しての上にこの無形ニ而能物と推移候而家に形なくしてこと　/＼く随ふて其宜しきを制する也、此無形之場合怠いたし候ハヽ何そ今般之様なる御組替を可致哉、是迄よりも悪敷御組分有ても夫を其通りに用て御軍用に立るならてハ上手ニてハ無之候、私ハ軍学ハ左程ニ心得不申候へとも城築ハ数も多く候故ニ其地形ニ推移候程之事ハ仕候、地形も様々有之或ハ細長き地も有、横斜なる地形も有、川々多き地形も有、三角なる地形も有、高下多き地形も有、中ひく成地も有、四角なる地もあり、丸き地形も有、谷之多き山も有、険峻成山も有、沼田もあれハ海辺も有、一ツとして同しからす、其地形に随ふて変化之無量難申上尽候、人数組も其通ニ而是と定りたる事ハなきものニ候、只其是迄之有来りを用ひて夫ニ増て能候得ハ相備を用ひ、減て能候へハ減、分而能候へハ分ケ、合て能候へは弐組も三組も備ニ立るニ而相済申候、軍学ハ活物ならてハ用ニ立不申候、然るに五拾騎と組直し候事死物之軍学ニ候、私か城築を仕候ニ有形の地形を取崩し候事ハ無之、長きハ長き地に随ひ、斜ハ斜に随ふて縄張仕候、其能地形に随ふ事ハ城築ニ数懸り無形の場に至らされハなりかたく候、過言之至極ニ候得とも軍学未熟之者ニ御大事之御軍用御任セ被成候故に大きなる喰違出来仕候事歎敷奉存候、是と申候茂重御役人方ニ実ニ軍事之大事を思召入られ候方無き故ニ候、論語ニも衛之霊公無道なり、康子か曰、夫如此ハなんそ不亡、孔子曰仲叔圉ハ賓客を治め、祝鮀ハ宗廟ヲ治め、王孫賈ハ軍旅を治め、如此なれハ何

そ亡へき哉と有之候、或ハ子の慎所ハ斎戦疾とも有之候、軍事なと大事なる事ハ無之候ニ、重き御役人方ニ御軍用を被為司候御衆なく、国之死生存亡之道なるを是と定りたる司役も無之、御互ニ間頼ミニ成、先達而異国船漂流海辺向御手当として出張の御調ニも御祐筆之類是迄軍事ハ何一ツ知らぬ者共所々ハ駈廻り、一騎武功之類へ独前之心得なと様々申達候故、重き御役人方心迷何事も一決不致、貝を吹か不吹か之御評議三日之内定りかたく前年の十一月より翌年二月迄百日余を経候へとも出張之事出来かね候、其上軍粧(用)之事を知らぬ者御用懸りを勤る故、何事も地並之了簡を以取扱候故ニ大間違多く候、司馬法ニ国用軍ニ不入、軍用国ニ不入と御座候へハ、軍事之ことを地並之心得を以調候得ハゆるかせの手おくれニ成、急応ハ相成申さす候、今般之事ハ異国船可成哉之御調故ニ如此弛かしく候而も差而構ニも成不申候へ共、実ニ異国之兵船御領分之海辺江参り候ハヽケ様成事ニ而可相済候哉、兵ハ拙速を貴とも御座候へハ、其事ニ拙候共早速に間を合せ打出る様ニ不致候而ハ不宜候、当時之出張之御調ハ実ニ異国船可参との御調ニハあらす、只公義之御触故ニ出張も被仰付候様ニ申なし、誠ニみえのミニ候、外之事ハ少しみえを飾候事も可有之候へとも、異国船多く漂流、倭国を窺候事以之外成御大事にて、文明年中蒙古之礼(ママ)も其初ハ蒙古船一艘二艘ツヽふら〳〵と相見候内ニ五百艘も千艘も一度ニ参り、西国筋大騒動ニ成候、神国之不思議ハ俄ニ大風雨之発し多く之異国船吹流れ、今におゐて伊勢ニ雨之宮風之宮御座候処、大風雨ニ而吹流し候以前ハ雨之社風之社ニ候得共、大風雨之事有之候上ニ宮号ニ被成候と承候、日本を浦安之国との神言葉も扶桑国ハ岸深く海なく(遠)洲高ニ而異国容易に着かたく浦々御心安く思召候とのことの由、ケ様成を承候而ハ昔神代ニ而異国より国を奪取んと仕候事も有之候与相見申候

いたし候士の有間敷いやなる意味合を含ミ申候、御当地大勢之師範ニ候へハ、其師範たる者へも他国・他領者ハともかくも、御家の人或ハ従者ニ而も稽古之事ニおいてハ相互ニ同じ門弟に成候事ニ候へハ外々よりも一入念頃ニ申合仕合をいたし候、とても無理成事を不致、我意を不立、すなおニ致候様ニ仕たきものニ候、武芸ニ志有て折角入門いたし候而も、あのものハ何れ之家中、此者ハ誰々家中なとヽ申てろく〳〵ものも不申、相手ニ成といひ候事もならす、自と身を引申候、乱軍ニ成候而ハ御足軽に而も、御中間ニ而も、従者ニ而も、如何様之軽き者ニ而も上之御大事を可奉救も難計候へハ、常々意味気味を止る叮嚀ニ申合せ候方可然候、物之師範と成てハ其芸之上手・下手ニよらす門弟江之■(「朱書」教か)方ニ而上手と下手とあるものニ候、其芸ハ下手ニ而も教方之能ハ其師範よりも弟子ニ上手出来、又芸ハ上手なれとも人を教て上手ニ仕立る事のならぬ人も有之候、此故ニ師範する者上手ゆへに弟子ニ上手の出来るにもあらす、師匠か下手ゆへ門弟皆下手ニもあらす、其教へ方之善きと悪敷ニ有之候、此故ニ指南を致し候程之人ハ誰ハ上手と［　］せず、是ハ下手といふてあれも［　］芸ニ而無之事迚も一芸一能有る人ハ［　］物ニ候、正木団之進ことき者ハ其業［　］上手、武芸ニおいて鎗も太刀も［　］不得手といふ事なく、何ニ而も［　］いたし候、廣キ江戸江出る多く［　］ニ候へ共、誰壱人立合候者も無之候、其内松平右近将監殿家来森戸三太夫と申者ハ本郷之加賀之屋敷迄ニ罷在候処、此者独ハ門弟子江之教方を団之進申聞、迚も中々仕合を仕候事者難及候得も、せめても後年ニ至り人之尋候時之為ニ候へハ御立合

被下候へと申、団之進も三大夫もしる人を持、しはらく気勢ひもを揚候迄ニ候、三太夫も上手の事なれハ一度団之進か位を見て門弟ニ成、色々利害を申候、其節団之進ハ天下之名人ニ而有へしと東都ニ而も申候、団之進高弟ニ吉川久米右衛門・中島武左衛門此両人ハ上手ニ而可有之と申候、其外廿五人程敵を撰付ニ打程之者出来仕候、其余皆同し事ニ候、然し美濃・伊勢・近江辺長百姓・郷士団之進弟子五百人程有之候、此者共若異変有之団之進罷出候程なれハ皆随身して出軍可致と常々申候、五百人之士ハ大概拾万石ニ中り候、左候へハ肥前国島原一揆之様成事出来いたし戸田家（大垣侯）出軍被致候へハ譜代之者五百人、浪人者五百人、都合士分千人ニ及候、弐拾万石余之分限ニ当り候へハ非常之時ニ至り其高よりも人数多く召連候事ハ公儀江之御奉公之第一ニ候、左候へハ物之師範を致輩ハ門弟ニ其芸を為励候事ハ勿論ニ候へ共、常々能心懸させ置候ハヽ上江之大き成御為筋も出来可仕候、惣而武芸ハ勿論之儀、何芸にても御用ひ被成候ハヽ此已後御国ニ珍敷芸も可有之候、当時ハ学文さへいたし候へハ能様成行故、武芸ハ勿論、何芸も実ニ思ひ入出精いたし候者ハ無之候、其上前々之同心も相止候故ニ芸能を以被　召出候事も先ハ無之候得ハ、此以後ハ自と武芸之上手も出来仕間敷候、三ケ津ニ相強き候程之名古屋ニ候へハ何芸にても芸能さへ有者ハ御家中ならは二男・三男なるも被　召出、若他所者ニ而名古屋へ参候ハヽ御扶助ニ被成候ハヽ、他国之芸能有者も自と参、非常之御用ニ立可申候、或職人とても名古屋ニ無之候事ハ御扶持に而も被下置候而足を為止置候、然又御中間之類を遣して為習置候ハヽ是又可然候、一両年以前鑓之柄之打柄を拵候者御国江参り候、暫居候へ共常々鑓さへも拵面々無之候へハ打柄を拵させ候者ハ曽而無之候、尤名古屋ニ打柄を拵候職人も無之候故、とふそいたし打柄之仕様相残り候様ニも仕度候へ共、難行届江戸江出申候、御治世故ニ打柄致候事も先ハいらぬ様、候へ共他国之樫計当ニハ成不申候、乱世ニ成て天気ハ不申及、其外国々より廻之候鑓之柄を差留候時ハ鑓之柄ニ事を欠可申、尾張・美濃ハ竹之性も能所なれは其時打柄為致候ハヽ御調法ニ奉存候、御中間なとニ為習置度候

（朱書）

「御中間之事」

一御当地之御中間と申ハ常々諸役所へ御茶をわかし、弁当之世話を致し、或ハ使之取次を致候、或前取と名付、或御切符金之者も有之候、御切米取之御中間ハ年数有之者ならてハ難成様ニ候、他所ニ而ハ切米取之中間を長柄中間と名付て軍用ニ用ひ候、中間故ニ外之中間より少格好も宜敷候、御当地御中間ニ御軍用之事無之候、是又常之事之なき時より其仕くせを御付置し候ハヽ夫程之御用ニハ立可申候間、多く之御中間之内筋骨之丈夫なる者を御撰被成、御切米も少余計被下、諸役所江出候而其非番之節長柄之打様組様ニ而も為習、鑓太刀之心懸をも為致置候ハヽ可然奉存候、大概三百人程も御長柄中間被仰付、壱組弐拾人程ツヽニ小組ニ相成而、五十人御歩行格好之者ニ頭を被　仰付置候ハヽ御軍用ニ宜敷候、公義ニハ八王子千人同心なとハ御長柄同心ニ候、御家ニおいて此事無之候、三百人を弐拾人ツヽ拾五組ニも被仰付候ハヽ今般御触之海辺向御手当向或知多郡辺之御固等ニ者山多き場所なれは歩戦之一助ニも可成候、其上若々　上之御出馬ニ相成敵より九死一生之戦を可仕懸様子も相見候時、三百人御長柄中間を御牀机本之外かハニ立、其内御庭組なとの者ニ玉の大キ成鉄炮を配り、其内ニ五十人御歩行之類之鎗備を設候ハヽ、敵何程強く突戦仕懸候とも御牀几本を破り候事ハ決而相成間敷候、当時も御中間之内丈夫

成武芸之好成者ハ名古屋ニ而ハ稽古場江出候事もならず、江戸ニ而浪人者などを頼ミ習候者も有之候、当時之御中間頭共ハ左様成事ニ心付無之、却而武芸ニ而も習候人ハ組内之害ニも成可申と申様子成にて留候事も相聞へ候、歎ケ敷事ニ奉存候

（朱書）

「御軍用ヲ申上候輩座席之上ニ而申候へハ尤之様ニも可相聞候へ共、業ニかゝり無心元相見候事」

一御軍用之事ハ重き御役人方ニ司候御人無之候而ハ迚も実ニ急軍之御間ニ合候様ニ御手配等も出来仕間敷候、至極の事を申上候ハゝ重御役人方ニも大事之事故ニ先容易ニ御取綺不被成、心ニ不慮之事有ても夫形ニ被成置、又夫程之御軍用を統（スベ）候程之御力も無之相見申候、御当地ニ而も少軍学を申候者など被召呼軍書等被成御聞候得ハ、早城陣備之事をも可申候へとも、一通り御聞候へハ尤之様ニもなり候得共、実ニ身ヲ入て此城陣備之三段を懸吟味候へハ中々容易之事ニ而者相成候事も無之候、古言ニ有之候、看ときハ容易にして入時ハかたくと御座候通、青書表紙壱本を古より申伝候通ニ申候間、聞人も済だ様なれども活物之業に成候而ハ一ツも用ニハ立不申候、其事ハ座席之上ニ而其大概を申ても敵も様々工夫をめくらし我を一盃はめんと計り候事なれハ、是て可仕留したりと思ふ事ハ皆敵に到れたるニ成て、大きな目ニ逢事ニ候、私之若き時分ニも東都ニ而も軍学を秘伝なとゝ申て様々之事を申候者有之候、武門要鑑抄（謙信流）なと読せ九一之格（カク）あるひハ風揚伝・迅雷伝など申候、風揚ハ車懸り之事ニ候、車懸りハ一ハ二ニより、二ハ一ニより、手毎ニ戦ふ人数ニより、地形ニより、越働抜働歩卒藩兵中を以中を討結たるものを解て敵を打を車懸風揚と云、又解たものを結て敵を討、是を迅雷といふ、則一名龍之丸備也、何れも武芸ニ而云ハ入身ニ而手本江飛込事ニ候、是又一利有事ニ而道理ニおいてハ勝るへきいわれなきとも、実ニなれハ勝れぬ事也 、其実ハ三一の心得といふて思ひ切て敵の旗本江突戦する故に、九千の人数ならば六千ハ存生、三千討死する物也、畢竟味方の軽卒を多く討死させて敵将を討て取事なれ共、都合能敵将を討取れハよけれとも、其事ならさる時ハ多く之者を討死させなさけなき仕方ゆへに、詰る所ハ如此羽出るか戦をすれば勝ても諸人の心離候て、大将ハ勿論侍大将・物頭・物奉行之類へ諸卒親ミ薄くなりて、夫より其家 ／＼ 弱ミとなるもの也、愚意の存候ニハ他流ニ而いたし候様成座席と而、敵とすれハ我ハかく、我如此時敵ケ様ニ備れハ又味方ハ如此しと申様成事ハ全以空備ニ候、孫子の奇正之事を申ハ皆時に取て変化する事ニ候、臨機応変と申候ハ其時に臨ミ様々之奇術出し、或ハ応し、又ハ変化する、一ツとして是と定たる事ハなく候、孫子曰能奇を出すものハ尽ざる事江海のことしとも有之候、将棊之上手と下手の指なるものニ而、下手は如何様成能駒組を習ふても其駒組を上手よりさせぬ故ニ習ふ事一つも用ニ不立直に負る也、又上手ハ相手之駒組ニよく乗して夫ニ随ふて勝事を覚たるもの故に、下手ハ上手ニ対して如何様ニいたしても勝事ハなり不申候、軍も其通にて座席之上ニ而免許目録之類一ツも用ニ立へきとハ不思候、徂徠が申せしごとく軍学も其大概ハ古之申伝も聞て、夫からハ古戦場等を能見、其地利之様子ニよりて我心を以て工夫可致事ニ候、千や二千の人ならハ是ハ味方是ハ敵とも見分べくも候へとも、多勢ニなりての大戦にもなれハ関ヶ原御陣のことく東西の人数合拾八万余も有之候ハゝ中々以敵味方難見分候、既ニ関ヶ原ニ而も石田・島津其外之人数夜ニ入之大垣城を出て、往還通りハ関東方より取切候故ニ海道より南へ押廻り関

野へ出んとするニ、石田之手之祖父江法斎が引揚て行人数と関東之御先備と霧晴れて見れハ其間わずかに壱町ハ無之、関東方之御人数追懸りニ戦んとするニ法斎申候ニハ是ハ夜之内より大垣城を出て関野へ出張すへしとていまた其備場ニ至らぬ人数ニ候、此故ニ御敵将申所存無之候、勝負後刻申けれハ夫形ニ物分れニなりたると也、軍之大事ハ見崩れ裏崩れ之類ニ候、其見崩れ裏崩れも将の罪ニ而、号令之正しからさるより事起るなれとも、惣人数之相印一対ならさるより、味方と味方不相分候故ニ候、何程大軍に而も旗幟ハ勿論、能相印を対にいたし、従者之小者迄も能見分ケ候様ニいたし候へハ先ハ裏崩れ見崩れも無之候、前ニも申候通私なと若き時分迄ハ分限積りと申候而何万石之大名と其高ヲ定る、其高ニ相当いたし候様ニ人数を積り、其人数之充行高、従者の数、城之様子、櫓門ニ土居堀候広、狭さま配(クバリ)、城内領主之家作之積、城内空地之心得、城外士屋敷之割方、町屋之積、城中之小屋割、出陣之人数積、留守居之人数積、留守之守方、出陣途中行軍之様子、小荷駄積、兵粮之積、武具之積、馬之多少、敵国ニ而陣屋の懸様、土居堀(ホリ)之様子、陣小屋之割方、地形之見立、馬草之心得、薪の積り等、其外何から何迄残る所なく積り立候事ニ而、ケ様成積物独して拾ヲも仕立候与自身ニも覚も出来、自と軍学之力も強く相成候、御当地多く軍学を申候者も如此積り物を不致候故、差支多く色々間違候事も相見へ申候、城も士大将小屋城も有、夫よりハ三・四万石之城も有、或十万石・十五万石之城も有、廿万石・三十万石之城も有、一国一城も有、陣取も其通ニ而、小身ニて陣取も有、相陣取も有、連(レン)陣取も有、其高ニ応して広狭なくてハなり不申候、備を立て戦ふ備も其人数と地形と相応せされハなりかたく、大勢之人数狭き所江入てハ大勢の詮なく、小人数広き場へ押し出してハしまりなく候、孫子に度量数祢勝と御さ候事ハ城取も陣取も備立も皆此意に不叶候而ハ相成不申候事を申候、城を城主之知行高と能釣合不申候而ハ、小身ニ而大キ成城を持候而ハ難防、又大身ニ而小き城居候而ハ内狭く、陣屋も其通りニ而其人数之多少もはからす、大きく取候時ニハ陣屋之内空虚多く夜守も難守、其高より狭けれハ差支多く、備立ても其備を立へき地形と人数之多少との積り合なく戦ハ、広場か能と心得て小人数を以広き場へ押出時ハ帯解き広けし様にてしまりなく、大人数にて狭き所江入れハ働きなりかたく、城も陣屋も備立もその人数之積り合、大将之分限ニ随ふて広くもなく狭くもなく能程にいたし候事を度量ニ叶申候と誉候事ニ候、此事ハ前ニも申候、いくらもその大名之分限をこしらへ夫を積り立て見ねバ難相知候、然るに一月・二月軍学之片端を聞せ、直ニ城築之伝授、陣取之秘伝など申候而北条の四方険固之縄張、北越之沈龍之縄、現龍之縄、又ハ千亀利之縄なとを写し取、或ハ大陣取・小陣取之図を少書取候而其伝授之謝礼金千疋・五百疋と定て、夫ニ而相済事ニいたし候、其伝を授たる人も夫ニ而成へき事と被思候事、扨々歎敷候、愚老ことき十四・五才より軍学に心懸、六十を越候而も今ニ十分ニ合点も不参候ニ、一月・二月ニ而城陣備之相伝為相済候事実用之所何と可有哉、無心元候

（朱書）

「相印之心得違之事、御家ニ通り相験無之事、相印ハ敵之紛レ者を吟味可致為ニ我人数ニ印を付る事」

一出張に付大番組壱組切ニ相験出来いたし、或ハ壱番ハ正月之正之字、二番組ハ二之字くづし、三番組ハ△印などゝ誠ニ気の毒成相印出来いたし、てうちん・纏・幟なとニ付申候、是又相印の大意を不存候いた

し方ニ而候哉、前に申上候通、せめて易の卦なるも付候歟、或ハ物之縁を取夫々ニ類するものニ致候へハ宜敷候得とも、物の一ハ正月ニ当り候、左候へハ一番組ハ正月之正之字可然なとゝ只小児之戯のことくにて、他国人の見る所も歎敷奉存候、此相験之事も容易ニハ難相成事ニ而、通り合印有之、役相印有之、一隊印有之、数限もなき事にて候、今般出張ニ付而も御家中不残之相印無之候而ハ不相済候、御領分計の御防にもあらす、伊勢浦なとへも先方より被相願候へハ御人数も可被差遣候旨仰渡され申候へハ、左様なる時ニ至候へハ他所之人数とも相交御防ニ相成可申候、此時に至御家之御人数ハ御家之御人数と能相分り不申候而ハ相印之詮ハ無之候、只今之相験ハ只一番より八番迄之組分而已之相印ニ而、御家中一統ニかゝわり候相印ニ而ハ無之候、又此一番組二番と申事も其組之名ニ而其実ハ宜敷事ニ而も無之候、譬八組有之候ハゝ年番を定め候而当年之八番ハ来年之一番与段々後備より先備へくり出候心得宜敷候、左候へハ当年之一番組ハ来年之二番組ニなり、年々如斯くり替り候事、備々常々心組ニ候、尤戦に臨てハ其変化様々なれハ一様ニハ難申、八番組先へも出、一番組殿も可仕候へとも、愚意ニ奉存候ニハ何の(之)何右衛門ハ一番組、何の(之)誰ハ二番と申事を止て、其年に異変有之候時ハ手合ニ直ニ可出心得を一番組ニ定たき事ニ奉存候、組ニ一番組・二番組之名有ハ不宜候、扨惣相印と申候事ハ御家之御人数ハ中間・従者ニ至る迄直ニ相知レ候様ニ仕候相印ニ候、先今般之出張銘々物数寄次第鑓印を付、或銀之馬れんら敷物も有、或小き札を付し鑓も有、或常々猩々皮を付たるも有、又鑓印ニ毛を付たるも有、鑓印なしニしたるも有、或ハ弓を為持輩も有、又太刀を付たる者も有、面々之了簡次第何一ツ節制無之浮た事之最上ニ候、其上第一ニ混雑可致事ハ従者ニ候、茶色之木瓜を付たる中間も有、又ハ花色ニ花菱を付たるものも有、又萌黄色の蛇の目付たる中間も有、五十キ之士五十色之従者ニはつ被にて、其外御目付・大番頭・御側大寄合衆銘々われ〳〵の従者のはつ被故ニ、実ニ戦闘ニ相成候ハゝ主人も戦召仕不相分、従者も主人を慥ニ不相分、他所之人数之召仕やう御家之家僕やら体もなきものニ相成可申候、畢竟相験と能正し候事ハ第一ニハ御味方之備へ敵の紛れ者を入間敷之為、第二ニハ我人数こほれ者ニすまじき為、第三ニハ伍と全く可為致為、第四ニハ頭と組とはなる間敷為、第五ニハ分合を能致ん為也、然るに其心得なくてうちんニ正月之正之字・二之字・三角之類を付事を合印と心得候事さりとハ武道不案内ニ候、御家之御人数馬上千、歩卒壱万位ニ而ハ一対差物、一対前立、従者ニ至る迄一対之発被を着せ不申候而ハ難成候、武教全書一之巻ニ対差物之事を付出し之事と有之、対差物といふハ一手〳〵之品を分ん為ニ一手〳〵を対に致を云也、然ハ小旗・四方四半・しなへ・吹貫・吹流し・母衣・金銀のえつる・尾花・白熊・黒熊・赤熊之類、何れも対にいたして紛れなからしむる、是を対差物といふ、出しハ面々思い寄次第家之紋、又ハ諸神諸仏の御名、其外何ニ而も其組其内ニ而誰かれと見分しるべき物を用ひて可也と御座候、此通にてハ御家中残らす八之字を通し相験ニ被仰付、或御旗本備之分ハ黄色之四半幟ニ上ニ八之字、御旗本備有とも一組切ニ或ハ黄色ニ黒き八之字、黄地ニ赤き八之字、黄地ニ青き八之字、黄地に白き八之字と申候様ニ相分、或幟之上ニ面々之出しを附、乳付之所に姓名を書候様ニいたし、都而御旗本之分ハ袖印腰差之類迄も黄色ニいたし、大番組八組ハ二組ツゝ陰陽を組て、或ハ白地ニ黒之八之字二組、白地ニ黄之八之字二組、各易之八卦を指物之下ニ付て一組ツゝ組分と仕、其余寄

合御馬廻組之類いく備有とも右之ふり合之一対差物ニいたし、冑の前立物も士分ハ金之丸ニ黒き八之字、士外之分ハ銀之丸ニ黒き八之字、御足軽ハ笠ニ金之八之字、御中間分は笠ニ銀之八之字、従者之馬上ハ士外ニ同、従者之若党ハ御足軽に同し、従者之中間ハ笠ハ朱之八之字を付、或御足軽頭・御使番・御目付・御長柄奉行・御旗奉行之類ハ前立物も中ニハ金丸之内ニ黒き八之字をいたし、其外(ソト)ニハ火炎なりとも波なりとも角(ツノ)なりとも其輩之物数寄次第、差物も一対差物ニ其輩之物数寄を為致、或持小旗壱本ツヽ為持候様ニ相成、夫より以上之輩ハ差物も冑も前立物も勝手次第ニも被仰付候様ニも相成、或万石以上ニても従者自分之物数寄無之、都而上之通り相印を用ひ候様ニいたし、鑓印迄も一対ニ成候ハヽ戦闘の時ニ至り乱軍ニ成るも能分り可申奉存候、此相印を委敷不致候而ハ人数も指麾仕かたく候、御家中残らす指物・前立物之絵図を書、其下ニ其輩之姓名を書、若党・中間之自分之相印迄も誰か見ても相知れ候様ニいたし、御軍用役所にて遂吟味、同し柄ならぬ様為仕、此相印・指物・前立物等之儀常々味方を遂吟味置候事ハ乱軍ニ敵之紛れ者を見出んか為なれハ、常々　上之御側ニ罷在候輩ニ此事を知らしめ置たき事ニ奉存候、申上候迄も無之候へども、甲州ニ而ハ敵之紛れ者改役ハ御歩行頭之役目ニ而、敵之味方江紛れて御牀机本へ来るを見出す役ニ候、敵の紛れを見出んとするハ味方ニ相印を能いたし、味方之侍大将其外大身ニ而一統之外なる前立物差物等迄常々能見なれ置候得ハなりかたく候、此故ニ追々も申上候通御家中惣御人数之帳或ハ差物・前立物・馬印・持小旗迄も絵図相認候而治世之時に能心得させ置されハなりかたく奉存候、当時之様ニあら　／＼敷事ニ而ハ恐れ多き事ニ候へ共、御牀机本紛れ込候事ハいと易く奉存候、実ニ上之御大事を奉存候而ハ浮た事のやふに奉存候、重御役人方ニもケ様成所ニ御念被為入候御心得之無之候事ハ歎敷奉存候、ゆめ　／＼なき事なれともかく奉申上候、私ことき之者敵方ニ有て名古屋御当地へ参り、医者・町人之類ニ相成、万事御様子を見、其欠め油断之所を察して不意ニ事を起し候ハヽ御大事申上る迄も無之奉存候、当流之軍学之心得ニ我心を以敵ニなりて見て、其欠め油断之処を見て、其手当をすへしと申候、是ハ北条安芸守殿申伝ニ候由師ニ承候

（朱書）

「段橋ヲ上リ堀ヲ船ニテ越候事、江戸表ハ御堀へ船を入候事厳敷御吟味ニ候事」

一御在城之節ハ御側向之輩ハ高麗御門・茅唐御門より御庭へ入、夫より御堀を舟ニ而越御座候間近く江参り候、或火事之節も銘々之てうちんニ而も持候而舟を越し段橋を上り指出候由、是程危き儀ハ無之奉存候、此事を盗賊とも能存、火事之節御小納戸向之輩之紋を能見覚置、其通り之紋所を付提灯を持、御庭へ入、舟を越段橋を上り候而、御座之間近く江上り、或ハ火を付、或ハ急ニ切立候ハヽ何と相成可申哉、如此事ハ御膝本之大事出来可仕候、私奉存候ハ御在城ニ相成候而御庭江被為入候とても御小納戸御小性壱両人之外ハ御堀を船ニ而御供不仕候様ニ相成、其外之者ハ外を相廻り候様ニ相成候様仕度御儀ニ奉存候、軽き同心・御坊主之類迄も右之船を越候而罷出候事ハ大き成大事出来可致基ニ奉存候、願くハ上ニも北御庭へ被為成候候節ハ御堀を船にて御越被遊候事を御止ニ相成、東鉄御門より志水御門・高麗御門へ被為入候得ハ宜敷奉存候、御堀へ舟を入候事ハ至而重き事ニ而、東都ニ而ハならぬ事ニ承候、譬御堀ニ浮藻多くから堀之堀の底ニ草高ニ成候而も、堀へ船を入、堀底へ人を入候事ハ容易ニ不致候様ニ不相成候而ハ非常之御守ニも成不申

候、東都ハ御堀江はしごをおろし候事もなり不申故ニ、御城内御堀之内ニ犬猫ニ而も落候歟、不拠はしごをおろし船を入候節ハ釣障子ト名付而御堀際ニ板を打、其杭ニ細引を付候而、其細引ニはしごの先を先をからげ付御堀へ下ケ申ル、たとへ御堀の水底迄階子之本届き候而も不届様子ニいたし候、是ハ御堀之浅深之知れ申事を大事ニいたし候故ニ候、然るに御当地ニ而ハ其事無之候、大節(ママ)之御堀江船を入候にも是と定たる奉行人も附添不申候、御城之御高塀懸置候而取放し候而も番人も無之候、他所ニハ夏旱魃ニ成堀水減候へハ城之廻りニ番所を立申候而非常を守り候事ニ候

(朱書)

「御城裏段橋より御座之間近くへ入候事御不用心ニ相見候事」

一段橋を下りて御堀之船江移候事ハ臆病門之意ニ而誠に以て御籠城難成九死一生之御時に此所を御出被遊、夫より深田中道ニ而真直に大曽根御屋敷ニ御移り被遊候御事相違無之相見へ候、当時渡辺飛騨守殿屋敷ハ前々ハ上之御屋敷ニ候由、右御要害之筋故ニ屋敷之取立方陣城ニいたし有之候、年を経候而深田も埋り昔之姿ニ無之候得とも御庭北東之角より大曽根迄ハ深沼之中ニ道を作り候事ニ而大事之時之御引揚道ニ相見申候、夫よりハ定光寺或木曽谷と段々御移り可被遊候事ハ自然之地利ニ而相知れ申候、或ハ右之辺ニ如何成様地道之あるへきも難計候得ハ尚々御大事ニ奉存候、御渡世も弐百年ニ及候へハ如何様成山賊・海賊可在も難計、或ハ慶安年中之油井正雪ことときの者出来可仕も不相知候、左様成大賊なと出来仕、御庭御足軽などのかふを為買、手下之盗賊を何人も入置、此壱人ニも申上候様ニ手下之者を伊勢参宮人ニ取拵候而荷網卵之中へ武具を入、熱田ニも清洲ニも甚目寺・勝川或ハ名古屋之門前町旅籠町ニ宿らせ、内外能合図を極て東向ニ火を付御役人東御門外之寄場へ出たる時、南者本町御門、西ハ巾下御門より盗賊とも御郭内へ入、本町御門・東御門・巾下御門・御還御門・志水御門等之御番人を切捨、御門を内より〆切、其時ニ兼而御庭御足軽ニ入置たる手下之者ハ御庭より船ニ乗、段橋を上り、爰かしこニ走り廻りて或ハ火を付、又ハ其辺に有合候者を切捨候ハヽ此御防ハ成間敷候、先達而も御軍用懸り之輩備立等之利害を申候由ニ候へとも、只野合之戦之了簡而已ニ成候、迚も野合之闘之事を座席之上ニ而利を付て申候而も変化之事なれバ何之益も無之、諺ニ申座敷兵法ニ候、備と申候ハ事なき時ニ異変之有へきを考て夫ニ備るニ而なけれハ備ニ而ハ無之候、亦至而名将ニなりてハ野合之戦をする様なる事ハせぬ物ニ候、敵のひますき間へ付込事ゆへに油断ハなり不申候、盗賊之頭をも仕るものハ今日之所行は悪く候へとも、誠ニ名将ニ候へハ凡慮之不存事をいたし候、其事を常々能く思慮仕置たき御儀ニ奉存候

(欄外)

「御小納戸・御小性・御坊主・御庭御足軽之類都而御側江出候面々も御城裏より御座之間近く江出候事決而不相成、如何様なる急変有ても西鉄御門・東鉄御門より登城ニ相成、以来ハ御坊主も先ハ外様へ出候事無之、御庭御足軽も株之売買不相成、或ハ養子いたし候共同組之内之者之二男三男を養子ニ致候而、何れ之者哉生所も慥ならさる者ハ決而貰不申候様ニ相成、若々御庭御足軽不身持ニ而退去いたし候ハヽ尋出し、其親子御預ケニ成候歟、又ハ御庭之内へ入て外へ不出候様ニ相成候ハヽ御内輪之事も外へ相知レ不申宜敷奉存候、油井正雪手下之士を東都之御塩硝蔵之番人之かぶを三年も前ニ為買置候而、事を計り候節御塩硝蔵ニ火を付合図致候事有之候へハ、御庭御足軽之儀ハ御心配無之候而ハ御用心ニも相成不

申候」

（朱書）

「犬山城人数少ニ相成候事、松倉豊後守武備怠り嶋原陣之事、長州萩之城下守方之事、尾張ハ古より盗賊之張本有之事」

一同心之類組替被成候ニ付而ハ、是迄犬山ニ罷在候同心も多く名古屋へ引越申候、犬屋城之儀ハ平岩主計頭九万石余之城ニ而、成瀬殿御家中不残犬山ニ罷在、其上ニ同心之類百騎も犬山ニ居住候ハヽかなりニ守城も成可申候へとも、成瀬殿之御家中之者も名古屋勝手之者多く成ニ而、犬山ニハ前々よりも人数少ニ相成趣承り候、御治世も久敷故ニ何方も城之守方弛ケせニ相成候得とも、畢竟其城主となり候而も日本国中之城々ハ皆将軍家之御城ニ而、其大名衆へ御預被成候事ニ而、何時御取上可被遊候も　公義之思召次第ニ候、城主となり候而も全以御預り物ニ候へハ、尚更非常之事を第一ニ心得相守事公義江之御奉公ニ御座候、外之城ニも違ひ犬山ハ険固之城に候得ハ、万一盗賊之類徒党いたし城内之人数少ニ成を計り知りて郭内へも入込不都合之事有之候而ハ公義より奉預候詮ハ無之候、甲府・駿府・二条・大坂御城番之儀ハ至而重き御事ニ而、御番ニ被参候輩ハ嫡子迄も　御目見有之候、是ハ全其城々之御番大切之事故ニ候、公儀ニハ加程迄ニ御念之入候事ニ候処、犬山城人数少ニ相成候事定而其いわれハ可有之候へとも、惣而一揆も起し候張本人ハ名将之器量有もの故、地険ニかしこく険城ハ必奪たかり申候、険ニ入候へハ外より難攻を能知る故ニ候、昔も犬山ハ留守番林蔵主子も虚を見すかして城を乗取候事有之候、当流ニも北条房州之申伝ニ険固之城ハ必其堅固を頼として守を怠るものゆへに其油断を謀り知りて攻へしとも有之候、寛永年中肥前国島原一揆も原之古城、後ハ海、前ニハ深田・平山多く険城なる事を一揆之長能知りて俄に城地ニ取立て籠城いたし候、松倉豊後守武備油断ニ而如此之城地早く破壊不致候怠りより西国三十三ケ国之大騒動ニ相成申候、犬山城附同心も皆名古屋勝手ニ成候上ニ、久々隼人正殿ニも御在府之儀、是程危き御儀ハ無之被存候、久しき御治世故必定大概ハ無之事ニ存候而非常之御手当申上候者無之候へとも、御治世も既ニ弐百年ニ及候へハゆめ／＼油断ハ相成不申候、慶安年中之油井正雪ことき者出来仕間敷ニもあらず、昔より美濃・尾張には大賊之出る所ニ而、古き事は熊坂張範、私なと物を覚たるも日本左衛門、本名濱嶋庄兵衛、是ハ名古屋産ニ而、親は御小人ニ而、幼名吉之丞と申候、此者と一緒ニ手習仕者只今ニ存命仕候、或ハ柿木金助、是も御領分柿木村産ニ而、名の有大賊鉄忠清助、是も尾張之者ニ候、或ハ清須ニ信長公御居城之時分ニも蜂須賀小六・稲田大炊何れも美濃・尾張・三河之盗賊之張本人ニ候、荻生惣右衛門が申候ニも尾張・美濃ハ土地もひらけ候故名将も出、或ハ大賊も出ると申候も尤に被存候、奉申上候も恐有御事ニ候へ共、秀吉公・信長公を奉始名有名将何れも加藤清正・前田利家・丹羽五郎左衛門其外之大名衆尾張・三河・美濃より出られ候事ハ挙て難算て、尾張ハ日本国之内ニも類もなき五穀之生る所ニ而、土地も広々と開け候故ニ名将も出れハ大悪人も出るニて、片時も油断之ならぬ国ニ奉存候、然るに犬山ニも人少ニ成、隼人正殿も久敷御在府ニ而、其上ニ御減格故ニ御家中ニ従者無之、乍恐上ニも久々江戸ニ被為入御在国無之故ニ、自と御家中ハ勿論之儀在町ニ至る迄怠り之筋ハ多く、守ハゆるミ申候、前々も勢州桑名城内神戸櫓江盗賊共住居いたし、軍用之蝋燭ニ而飯を焼、所々江押入、漸々久敷過候而此事相知大騒動ニ成候、私或申上候も恐れ入候へとも、当時上ニも御在府、隼人正殿も御同様ニ

而、竹腰殿ニハ御病身ニ而御出勤も無之候へハ、一入名古屋御城廻り御城下町々ニ至る迄非常之御守も可被為在候御儀奉存候、勿論犬山城も御同様ニ而可有之候処、却而御人数少ニ成候事歎敷御事ニ奉存候、たとへ為差盗賊ハ無之候而も、御郭内へ盗賊入候へハ郡国之評判も不宜、武備油断之様ニも相見申候、其上壱人・弐人之小盗人ニ而も城内へ入候ハ、盗人ハ大きく申たがり候もの故ニ、御城内御郭内御門ニて御番人之守方惰弱ニ不仕、御郭内外廻り御足軽・辻番人ニ至る迄も厳重ニ無之候而ハ不宜被存候、とかく何事もゆるかせニ相成候事ハ名古屋之風ニ成候、惣而非常之事ハ急応を主と不仕候而ハ不相成候処、万事ニ付而急之間ニ合候御調筋ハ曽而無之候、兵ハ拙速を貴、いまた巧之久敷を不聞、兵久して国利有ものハこれあらじと候へハ異変ニなり彼是と評儀まち〳〵ニなり候内ハ一揆徒党も日ニ増、夜ニ増、余計ニ成、向ふの敵ニ手合能出来致候、惣而武備之事ハ急応を第一と不仕候而ハ難成候、其異変ニ応し候事を備と申候、当時にてハ陣列之事を備と申て六ケ敷事ニ申なし候、是ハ誰もいたし誰もなり申候、北条房州（兵法雄鑑）之被申候、我備能して敵の立るを見てこれに勝と申され候事ハ陣列を能立て敵に戦ふ様成鎖細之事ニハあらす、武備ニ付何一つ欠めなき事を被申候、平生事之なき時ニ少しも油断せず、今も一揆徒党起るべきも知れず、即刻手合出来申様ニ調置候事武之根本ニ候、軍学と申ハ軍之時之事と思ふハ心得違ニ候、軍学ハ常々軍学ニ御さ候、士之事ハ一ツとして軍学をはなれ候事ハ無之候、常より仕懸仕くせ付置不申候軍用（学）ハ用ニ立ぬ物ニ候、先頃も長州之禅僧長門萩之城下之物語いたし候、萩之城地ハ北海江おし出し候城ニ而朝鮮迄一筋ニ支なしに参られ候よしにて、萩城より北海中拾七・八町程ニ小山一ツ有之候、此所江士分之者百五十人・足軽三百人毎日相詰、此小嶋を守候旨、毎日百五十人之士に三百人之足軽ニ而ハ三番ニ交代為致候而も士ニ三組ニ而四百五十人、足軽三百人三組合九百人ニ候、士・足軽千三百五十人、夫ニ従者其外中間類も差加り不申候而ハ難相成候へハ、此小嶋計ニ常々弐千人之手当と相見申候、然れとも僧之申所ニ候へハ其実否不慥候、愚拙被存候ニハ此小嶋附之守人士分之者百五十人、弓鉄之足軽都而三百人、是を三番ニ番を勤、さすれハ士分五十人足軽百人ニ而大概一備之恰好も有之候、定而是ハ番頭差添候事ニ可有之候、勿論此嶋を異変之為ニ取られてハ萩城之害ニ成る嶋故ニ如此守を重く被申付之事なるへけれとも、乍然此嶋萩城と隔候十二・三里ニも及候ハヽ左も可有し候へとも、わづかに十七・八町之事なれハ常々城内よりハ嶋之様子も目ニも見へ、城内之櫓より昼夜遠候をいたし候ハヽ其嶋へ右のことく人数を遣置ニも及間敷候へとも、西国筋之諸家ハ如此守方厳重ニ候、尤異国より日本を奪んといたす事ハ神代も度々之事ニ而、異国之御防之事ハ神軍伝専一之事ニ而、扶桑国之内之国ニ相互之戦ふ事ハ国取合と名付て勝ても負ても差る苦ニも不相成、我子供之闘ニ而勝も負るも同し事なれ共、神代より伝たる国を只異国之為ニ奪れてハ難成事故に長州之萩藩も如此被備候事ニも候哉、医者之初心なる内ハ薬もきゝ能さじも思る様に申なし候へとも、少薬之能毒合点参、おそろしめ付と療治ハねからきかぬ物ニ候、是何故なれハ其薬之能よりハ毒之有事合点いたし候故ニ、此薬を用ひ多くハ中り可申歟と気を有故ニ候、軍学も左様□物にて、少其道合点も参り候へハ実々能調へ置されハ必急軍之時ニ間ニ不合事相見へ、此所江敵ニ付け込れ多分ハ何となるへき、此所之空虚へ乗込れたらバ如何なるへしと先我方々常々守之怠り空虚かけ斜計（ヒヅミ）に目付き申ものニ候、此故ニ向へ懸るよりも先身之用心耳

ニなり申候故、守成を重ニいたし候、是ハ軍学計ニも無之惣而武芸も同し事ニ候、鑓も太刀も薙刀も其外何に而も初心之内ハ只敵が突たく打たき事計にて、己が足本ニ心付不申候、向ニ計取れ申候、夫故ニ諺に申候なま兵法大疵之基と申て、したゝかに擲れたる多く候、追々修行参り候へハ自と敵へ懸る事もなくなる身構を大事ニして敵と太刀間・鑓間之内へ踏込せぬ事を知りて此方から事を不致、敵の我切先ニかゝるを待て其時ニ突打替故ニはずれめハ先ハ無之、右之通能守る事を知るゆへニ何程敵急ニ打かけ突かけて急るれ共急ニ応対いたし緩かなるも夫ニ随ふ、然れとも是ハ常ニよく油断なく心懸申故ニ我思ふことく変化自由ニ成候、何程其利を申候而も其業ニ懸り候てハ自分ニ稽古不致利計師に聞て極意免許取候而も一ツも用ニ難立候、俗に申候座席兵法畑水練ニ而座敷之内にて立調ふ算木或ハ碁石之類ニ而旗幟を拵、備候(之)立振様々の利害申述候へハ成程一利有、尤之様ニも候へ共、右に申候武芸の修行なとニ極意免許を貰ふたることく実用に懸り候而ハ一つも埒明不申候ものニ候、愚拙若き時分ハ武教全書・兵法雄鑑ニ而も読済候へハ夫よりハ積り物と申に懸り、積り物者譬ハ今俄に三万石・五万石・拾万石之大名に封せられたる、此分限ニ而武備ニ付而ハ何事も残りなく相認可差上候と申事ニ而、夫より打かゝり三万石ならハ其土地之免相ならし三ツ五分か四ツかと定、従者之積、主人の入用、武具・馬具・雑具、城取之分間、城内家作之心得、城外士屋敷・町屋之割方、備立・陣取・人数割、出軍・留守居之積、籠城之心得、兵粮積、狭間配、旗・差物・馬印・円居之類・相印・相札、其外何から何迄一つとして欠めなき様子、皆陣屋割・城下割・備(侍)屋敷・町家迄も其屋敷之広狭壱分壱間之割を以分間ニ仕立、師江差出候事ニ而、分限積りを致可申与師申渡てよりハ同し門弟にも相談致事不相成、我一了簡を以積立候事ニ而、わづか三万石位之分限を積立事ニ而も中々容易出来仕物にあらす、至而心労いたし候事ニ候、釼鎗長刀之類之仕合と軍学之積り物ハ同し事と而、則分限積ハ軍学之仕合ニ候、委敷出来之上一袋ニ入て師へ出し、師之了簡を聞候事ニ候、如此之積り物数出来候へハ軍学之事ニ付而ハ差支もなき様にも相成候へとも、亦其上ニ師之好物と申事有之候、是ハ譬ハ其諸侯ニ被封国に狩人多、鉄炮足軽直ニ召抱用られ候へとも、士ニ取立る者なく他国之者を召抱んとするに新家故来る者なしなとゝ申、或ハ急ニ三万石給而三ケ月出軍用捨、四月目より出軍可致との事なるに、其被封候国ハ山国奥深きも土地に武具調へかたき所、ケ様なる難題を申懸て門弟ニ軍学ニ骨を折ける故ニ皆々精心を入て修行仕事ニ候、今時之軍学師範之輩ハ城之縄張一ツも陣屋割一ツも自分ニ手懸不申候、門弟子ニ申伝候事なれハ前に申候仕合も何も不致して極意免許をもらひ候様成事ニ而、迚も非常之用ニ可立とも不被存候、其証拠は御当地にて軍学師範之者も多く、前々之同心之類にて、名古屋程之所ハなきと心得親より申伝候青表紙之軍書を此上もなき大切之書と心得講釈書等いたし置を夫形ニ口うつしニ申候故ニ是又座席之上ニ而備立之利害申ことく先夫ニ而相済様ニ候、又其者ニ寄て軍学稽古仕候程之者ハ皆釼鎗ニ而申候ハゝ太刀之持様鎗之身構一ツ知らぬ様成輩故ニ一ツとして非難打事ハなり不申候、此故ニ申伝る者も聞者も死物之軍学ニ陥候而活物ニ出不申候、惣而当時ハ軍学ニ極意免許之類有之候、軍学ニ左様成事ハなき物ニ候、軍学之極意免許ハ七書を能よミ就中孫子ニ通し敵の模様ニ推移て能変化して勝事を覚たるより外ニハ無之候、北条殿も山鹿も皆荒述之書之内ニ其事相見申候、畢竟軍学之極意免許之有へきいはれ曽而無之武教全書・兵法

雄鑑之内様々之事を取集て不審を立て善を望候へハ其時其不審之書の奥ニ一首歌を書而送られ候、なか〳〵にとりて見れは何もなし、あまりに山の奥を尋てとか申候、是ハ誠ニ兵書之至極之場ニ而神なるや〳〵無形に至る事ニ候、いつ迄も申伝て有形ニからまれ候、軍学ハ実用ハ一つも無之被存候、軍学ニも流々有之、人之能存候ハ長沼流・楠流・的当流・宇佐見流・謙信流之類数限りも無之候、何れも其師たる人ハ上手故に其書も顕し、其事も能仕候へとも、年を経るに随ふて段々伝る内ニ能事ハ消滅して仕廻、凡倍之耳に入易き事計り残り候、其内能事歟いたして信玄・謙信之書ハ粗相残候、其外流儀〳〵も多く此二公之書に基ていたし候物ニ候、尤北越流ハ備篇ニ精く、城築ニ粗く、甲州流ハ備篇に粗く、城取ニ精く、なとゝ申なし候、何様ニも要鑑抄なとも備候(之)応変ハ其利有様ニ相見申候、全体私之若き時ハ土井大炊頭殿家来ニ宮田十郎左衛門と申者有て、東都ニ而此者専謙信流之軍学を指南仕、私も参候、謙信流と申候へ共其本ハ宇佐見駿河が申伝へ候事ニ而謙信之被成候故ニ謙信流之名も付候様ニ承候、此宇佐見流之極意と名付迅雷・風揚之二陣ニ候、前ニも申候通何れも敵江之入身ニ候、長蛇投撃返巽(翼)櫃(櫃) 断覆震うづ之類皆面白き人数遣ひニ候、成程常々能広場ニ而練たらハ利有へき事ニ候、北条も山鹿も此事ハ粗く相見へ、然て北越之城築ハ蟄亀利縄・箭龍縄・現龍縄、是を以其利を示候事ニ而、地形ニ推移変化之利薄く候、北条安房守之四方堅固城之図を宮田十郎左衛門分間ニ直し候而北越之蟄亀利之縄と申立、一枚伝授ニいたし候とて大きに閙敷成申候、何流ニ而も実ニ心を用候而工夫いたし候へハ夫程之事ハ有へく候、何程昔の上手之用ひられ候書にても下手なれハ其事をいたしかたく候、流々多皆其覚たる流儀をよしと不致者ハなく候、是又座席之上にて善悪を申ても闘てみねハ分らぬ事ニ而候へハ、何流も必統にて御用ひかたき事ニ被存候、世も末ニ成候ニ付テハ武士養武備怠り勝ニ成、上がかれ下がはゞミ申候物ニ候、盗賊ニ至る秀才之者出来可仕候も難計候、大き成盗賊之発る事ならぬ程ニ武之鉾先を研立置へき事、則武門要鑑抄巻之一国政伝国家鎮護之段ニ候、私若き時分宮田なと申候も国政伝を昔ハカツナハヤヒ伝と申候、武(弁)内宿祢之書ニ固て云う事ニ而後ニカツナハヤヒノ神号を恐れて国政伝と名付候と申候、武ハ国主之政を補て無事を調へ安全伝をなすの事と申候、或武教全書大将三ツ之采配八幡宮神前ニ而勘助信玄江奉伝授候旨、何れも日本国之軍事者神国なれハ左も有へき事ニ候、とかく武備といふものハ常々武士ハ武之外ニなく候、扶桑国ハ小国なれ共大国の為に奪れ不申候、神国武国之武備少も欠めなく非常を守へき国風に相見申候、故ニ古より武之有国ハ盛、武之なき国ハ必衰へし、是則自然之弁(理)ニ候、御当地も近頃ハ前々と違武事ハ大きニ衰へ申候、別而明倫堂御取立候へ(上)ハ、本を懐中いたし候へハ、人物も能き様ニ相成候故ニ自と儒者風ニ成行、士之持前之釼鎗弓馬儀鄙之様ニ相成候、御足軽迄も詩作をいたし其筋へ出し、誰ハ笙を能ふく、誰ハ横笛を致稽古候と時々流行ニ推移て其頭江申達候へハ、頭も肝心之射打之職分なる事を打忘れて私の組の足軽ニ詩作を仕候、或ハ簫・横笛を吹候者出来いたし候なとゝ申募る輩多く相成候、とかく物にかたより候ハ御当地之風ニ候、家語に文事有者ハ必武備有、武備有ものハ必文事有との聖語ハ至極之御儀ニ候へ共、当時之姿にてハ上士(士)ハ左もあるへけれとも、中士以下ハ文事有ものハ必武備なし、武備有もの必文事なしニ候、何卒文武兼備ニ仕度候

（欄外）
「積物之事ハ前ニも認候而八重に成候へとも
其侭ニいたし置候」
（欄外）
「此積り物と申も余程心を用ひ不申候而ハ難
成候、私弟子石河伊賀守殿家来石崎喜代蔵
と申者全躰算術能仕候、夫故積り物も分間
割苦ニ致不申候、高五万石之大名之分限積
を仕候、幸葛籠之下ニ有之候、御慰ニ可懸
御目候、積り物之事ハ前ニも申候得共其通
ニ致置候」